

## 序文

マーガレット・ミッチェル作『風と共に去りぬ』に関する書籍は数多く存在する。ミッチェルの伝記が少なくとも五篇、書簡集が三篇あり、この小説の文学的価値を考察した評論は数知れない。『風と共に去りぬ』——一九三九年製作の同名映画も含む——に関する書籍や記事等の文献目録を作成すれば、とてつもなく長いものになるはずだ。だから、なぜいまさら新しい本を出すのかと思う向きもあるだろう。

発刊七十五周年を迎えるにあたり、われわれは新しい試みをおこなった。『風と共に去りぬ』が世界的な超ベストセラーとなっていく過程に焦点をしぼり、その歴史をはじめて一冊の本にした。本書は著者ミッチェルの伝記でなく、その著作の伝記であり、この小説の起源が生まれたミッチェルの幼少時代から、一つの文化現象にまで発展した現在までの歴史を描いたものである。われわれは、この小説がアトランタの狭いアパートからニューヨークの五番街のマクミラン社へ、そして全米へ、全世界へとはいっていった軌跡を丹念に追った。タイプライターと電報の時代にこの小説がいかにして生まれ、世に出て、そして世界を席巻していったか、その課程を描き出した。そこには当然、著者や出版社、代理人

の愛憎というものが存在し、とりわけ著作権管理をめぐる攻防はすさまじい。われわれはそういった部分にも躊躇なく入り込んだ。著者ミッチェルは著作権を守るために自ら戦いつづけ、それが引き金となって国際著作権法に対するアメリカの方針が変わっていった。海外の海賊版の流出を自ら阻止しながら、マーク・トウエイン以後、世界にセンセーションを巻き起こした作家として、ミッチェルはアメリカ人作家の外国著作権の保護の必要性を強く訴えた。本書はそういったミッチェルの活動や、著作権管理者としての仕事ぶりも紹介している。さらに、本書は著者の伝記ではないので、著者が亡くなっても話は終わらない。ミッチェルの死後、夫、兄、そしてアトランタの三人の弁護士が、世界で最も価値のある著作権を守り、多大な利益を生み出していく激動の歳月にもスポットをあて、現在までの全軌跡を描き出している。

『風と共に去りぬ』の歴史に詳しい読者なら、いくつかの事柄に関して本書と過去に出版された関連書籍とでは内容が違うことに気づくだろう。われわれは『風と共に去りぬ』の研究者がこれまで入手できなかった情報を得ることができた。それらをもとに検証しなおした結果、過去に語られた内容とは違う事実が見えてきたからだ。とりわけ、ミッチェルの原稿に最初に注目したマクミラン社の編集者ロイス・コールとミッチェルのあいだで交わされた私信を読めたことが、非常に大きな収穫だった。これらの私信から原稿がどのようにしてマクミラン社に渡り、出版に至ったのか、新たな真実が見えてくる（私信には、コールが『風と共に去りぬ』のオリジナル原稿を読み通し、内容を分析した意見書も含まれている。また、ミッチェル家以外の人間で最初にオリジナル原稿を読み通したのは、コールだった。）

貴重な書簡を見せてくれたコールの娘のリンダ・テイラー・バーンズ、息子のターニー・アラン・テイラーに心より感謝を申し上げる。また近年、『風と共に去りぬ』に関連のある大量の書類が、ミッチェルの遺産管理会社によってジョージア大学に寄贈された。これにより、この小説が世界に広がっていく過程だけでなく、誕生するまでの経緯もより詳細に見えてくる。さらに、長年に渡って遺産管理をおこなった弁護士のパール・アンダーソンとトーマス・ハル・クラークへのインタビューも実現した。両氏の見解は、『風と共に去りぬ』という複雑な文化現象を読み解く貴重な鍵である。

マーガレット・ミッチェルのような天性のストーリーテラーが残した記録から歴史を再現しようとすることには、当然、危険が付きものだ。ミッチェルの友人はかつてこう語っている。「デパートでペギーとばったり会い、お互いに面白い物にくたびれてむっつりしていても、あとでペギーがそのときの様子を語ると、二人とも陽気で魅力的な人物になっていくんですよ」。雄弁なのはミッチェルだけではない。本書に登場する人物はみな雄弁である。表現することに力が入るあまり、真実が二の次になってしまうこともときにはある。言葉で表現されるにしたがって内容が変化していったとしても、それはそれで良いだろう。誇張があるという意識を持つていれば、何事も額面通りではなく、余裕を持って受け入れられるものだ。過去に語られたものとは内容が相反する事柄、事実関係が定かでない事柄、そして疑問が残る事柄は極めて慎重に扱った。さまざまな証言や記録があつて事実を特定できないときは、

1 「訳注」ミッチェルのこと。

その旨を記した。そうすることで、『風と共に去りぬ』伝説の核となる事柄に新しい解釈を持ち込んだ。われわれのこの試みによって謎が解明され、まちがいが訂正され、この比類なき小説の比類なき歴史がより正確に包括的に考証されていることを願っている。本書の目的は、『風と共に去りぬ』の歴史を書き直すことではなく、より正しく改めることである。

ヴァージニア州リッチモンドにて

エレン・F・ブラウン

ヴァージニア州ミッドロージアンにて

ジョン・ワイリー二世



# 目次

登場人物

iv

序文

vii

第一章 彼女には言い知れぬ魅力がある 一九〇〇年—一九三五年八月

1

第二章 古き南部の原稿 一九三五年八月—一九三六年一月 41

第三章 活字になつた原稿 一九三六年二月—三月 67

第四章 可能性に満ちた本 一九三六年四月—五月 97

第五章 熱狂を煽る 一九三六年五月—六月 129

第六章 大成功の狂騒の渦 一九三六年六月—七月 157

第七章 あの、風の本 一九三六年八月—九月 181

第八章 名声へのとまどい 一九三六年秋 207

第九章 風と共に去りぬ社 一九三六年十二月—一九三七年四月 239

第十章 わが子を守る 一九三七年春—十二月 267

